

# 黒部市宇奈月温泉地区における大火前後の土地利用の変容

The transition of land use before and after the big fire in Unazuki hot spring district

松井大輔<sup>1</sup>・岡井有佳<sup>2</sup>

Daisuke Matsui and Yuka Okai

<sup>1</sup>新潟大学助教 工学部建設学科 (〒950-2102 新潟市西区五十嵐二の町8050)

Assistant Professor, Niigata University, Dept. of Civil Engineering and Architecture

<sup>2</sup>立命館大学准教授 理工学部都市システム工学科 (〒525-8577 草津市野路東1-1-1)

Associate Professor, Ritsumeikan University, Dept. of Civil Engineering

Unazuki hot spring district of Kurobe City experienced a big fire after the WW2, which destroyed more than 300 buildings. Over years, It was found difficult to explore the historical context of its townscape. This paper aims to clarify the transition of the land use and townscape before and after the big fire in Unazuki. We describe that certain original forms are inherited after the big fire including the hotels near the edge of the cliff, while the central district consists of vacant land. We conclude the existing form of the city can attract further attention by planners to promote Unazuki for tourism purposes.

**Keywords :** *big fire, land use, heritage tourism, Unazuki hot spring*

## 1. 研究の背景と目的

温泉地は日本特有の文化的景観を有しており、国際化の時代において観光的価値は高い。しかし、マスツーリズムから個人旅行へと国内旅行の形態が変化するなかで、地方の温泉地の多くが疲弊している。国が目指す観光立国の政策を進める上では、文化的景観を活かしながら、このような地方の温泉地を再生していくことが肝要だと考える。ただし、地方の温泉地には、災害や高度成長期のリゾート開発の影響を受け、地域の歴史的な文脈を読み取りにくくなっている地域も少なからず存在する。これらの温泉地においては、地域における災害・開発の歴史を見直し、それ以前の都市空間の特徴を把握することで、歴史的な文脈を紡ぎ直すことが必要であろう。

富山県黒部市にある宇奈月温泉地区は、黒部川の電源開発を背景として1923（大正12）年に開湯された温泉地である。1946（昭和21）年5月21日に市街地のほぼ全域を焼失する大火に見舞われており、ここで一旦は歴史的な文脈は分断されたと捉えることができる。ただし、その後も黒部川の電源開発の基地としての役割は継続しており、今後の当地区における観光まちづくりでは、日本の工業発展を支えた黒部川開発の歴史を活かすことが地域再生の方法論の一つとして有効だと考えられる。本研究は、宇奈月温泉を事例に①災害前後の都市空間の比較および②景観的な特徴の変化を明らかにすることで、災害後も引き継がれた宇奈月温泉の歴史的な文脈を見出す契機になることを目的とする。

## 2. 研究の位置づけと方法

### (1) 研究の位置づけ

宇奈月温泉の都市形成に関する研究としては、野島による宇奈月温泉の歴史に関わる研究<sup>1)</sup>や、永井によ

る宇奈月温泉地帯平面図（1942（昭和17）年作製）の分析<sup>2)</sup>、富澤らによる明治・大正期の宇奈月温泉及び黒部川上流の温泉郷の発展史に関わる研究<sup>3)</sup>などがある。本研究は、うなづき友学館の八尾隆夫氏らが発見した1929（昭和4）年の地図を分析対象に加える点、1946（昭和21）年に発生した宇奈月大火の前後の都市空間および景観の変化を明らかにしようとする点で新規性を有すると考える。

## (2) 研究の方法

本研究の構成は以下の通りである。まず、第3章では、既往研究などを参照しながら宇奈月温泉と1946（昭和21）年に発生した大火の概要を整理する。次に、第4章では、先に述べたように1929（昭和4）年に旧内山村<sup>1)</sup>役場によって作製された地図および1969（昭和44）年の宇奈月温泉商店街配列図を資料として用いて、土地利用の変化を分析する。さらに、第5章では、うなづき友学館および地元住民所蔵の古写真を用いながら、景観の変容を分析することとする。最後に、第6章において本研究で得られた知見をまとめる。

## 3. 宇奈月温泉の概要

### (1) 宇奈月温泉の成立経緯

宇奈月温泉の歴史は、1923（大正12）年の開湯まで遡ることができる。大正も後半にさしかかった頃、それまで秘境の地であった黒部川の豊富な水量を活かした電源開発が、東洋アルミナム株式会社によって始められた。1921（大正10）年に、東洋アルミナムは黒部鉄道株式会社を設立し、1923（大正12）年までに三日市と桃原を結ぶ約17kmの鉄道を完成させた<sup>2)</sup>。その後、桃原は宇奈月温泉と改称され、温泉リゾート地として旅館群や遊興施設の開発が始められる。また、宇奈月温泉は黒部川上流における電源開発の基地としても整備され、社宅街が形成された。宇奈月温泉は、テニスコートやプールなどを有する当時最先端の温泉リゾート地としての側面と、黒部川の電源開発に従事する作業員の保養地という二つの側面を持って誕生した。

黒部鉄道株式会社は現在の宇奈月温泉にあたる約3万坪の台地を所有し、開発した。開湯からわずか3年後の1926（大正15）年には、旅館・料理店・劇場などの娯楽機関をはじめ、銀行・郵便局・病院などの機関や売店など150戸に及んだとされる<sup>4)</sup>。いずれの旅館にも内湯があり、成立当初から外湯を巡り歩くような文化はなかったと考えられる。

### (2) 1946（昭和21）年大火の概要

1946（昭和21）年5月21日11時30分頃、共同浴場前の作業場付近から出火し、折からの風速5m/sを超える西風にあおられ、火は町中に広がった。宇奈月温泉駅にも燃え移ったため駅前の川は使用不可能となり、また黒部川は急崖の下を流れるためホースが届かず、消火活動ができなかったという。宇奈月温泉の全349戸のほとんどを焼き付くし、午後2時30分頃に鎮火した。富山館・宇奈月館という旅館、日本電力の社宅5戸と北日本鉱業の社宅、山岡別荘など14戸のみが類焼を免れた。罹災者数は1731人に及んだが、死者が出たという記録はない。被災後、日本電力が1000万円を投じて黒部川の電源開発の専用軌道、輸送関連施設、社宅や学校の復興に協力する旨を発表し、内山村は村有林を払い下げて資金を捻出し、仮設住宅の建設を行った。

## 4. 宇奈月温泉の土地利用の変化

### (1) 大火発生以前の宇奈月温泉の土地利用

大火発生以前の宇奈月温泉の土地利用は、1929（昭和4）年に作成された地図（図1）を参照して分析する。

地図の左下から中央に延びる線路が黒部鉄道（現在の富山地方鉄道本線）で、中央から右上へと延びる線路が日本電力の軽便鉄道（現在の黒部峡谷鉄道）である。両鉄道の位置関係は現在よりも近い。

地図の右下部分、黒部鉄道宇奈月駅が建つ方面は、日本電力の社宅街が広がっていた。整然と同じ規格の建物が並んでいる地域と、不規則な形の長屋や戸建て住宅が建ち並ぶ地域にゾーニングされていたことが読み取れる。また、所長社宅は規模も大きく、周囲を生け垣で囲われていたようである。宇奈月温泉の駅前には、現在は土産物店が建ち並ぶ一画となっているが、当時は銀行や郵便局なども建っていた。

一方で、地図の左上部分は旅館や遊興施設が多く配置されていた。特に、崖の下に温水プールなど遊興施設が配置されている点は、今の宇奈月温泉にはない土地利用である。また、黒部川や宇奈月谷に向かって開け



図1 1929（昭和4）年の宇奈月温泉（所蔵：うなづき友学館）

た崖線の際に多くの旅館が建設されている。一方で、黒部川を見渡すことができない町の中心部は小規模な旅館と、その他業種が立地し、空地も多かったことが確認できる。以上の二点は現在の宇奈月温泉の土地利用にも通じるものがある。これらの温泉旅館の中で1946（昭和21）年の大火で焼け残ったのは、地図の左下のほうにある宇奈月館と富山館のみであった。

以上のように、大火前の宇奈月温泉の地図をしてみると、黒部川や宇奈月谷を見渡せる景色の良い区域に大規模な温泉旅館、町の中心部には小規模な旅館とその他業種、線路を挟んだ高台には日本電力の社宅というようにゾーニングが施されていたことがわかる。



図2 1969（昭和44）年の宇奈月温泉（所蔵：うなづき友学館）

## (2) 大火発生以降の宇奈月温泉の土地利用

次に、大火発生以降の宇奈月温泉における土地利用の状況を、1969（昭和44）年に作成された略地図（図2）を参照して分析する。

大火以前と同様に、富山地方鉄道本線の線路は、地図の左下から中央に向かって走っている。

大火以前と変わりなく、黒部川と宇奈月谷の崖線にそって大型の旅館やホテルが立地している。ただし、宇奈月谷方面には北陸銀行や北陸電力、東洋紡などの企業の保養所も建てられている点が、大火以前からの変化といえる。さらに、黒部川と宇奈月谷には複数の橋が架けられ、対岸にもホテルや保養所が建設された。また、大火以前は黒部鉄道宇奈月駅の前にあった郵便局や銀行などの金融機関も旅館街のほうに移転しているなどの変化が見られる。

一方で、地図の右下部分は土産物屋街となって、現在の土地利用に近づいている。地図には示されていないが、地図外の右下部分には関西電力の社宅街が維持されていた。ただし、子供が違う場所・グループで遊ぶなど、土産物店を含む温泉街と社宅街のコミュニティの繋がりは深くはなかったという<sup>(3)</sup>。

## 5. 戦前戦後の景観の変化

最後に、古写真や絵はがきを用いて、宇奈月温泉地区の景観の変化を分析する。

1946（昭和21）年の大火を乗り越えた建造物について整理を行う。数少ない焼け残った建物である富山館や宇奈月館などの旅館は、戦後のリゾート開発などの影響を受けて現代的なビルへと姿を変えた。同様に、焼け残った日本電力の社宅は、戦後も社宅街が形成されていたものの、再利用されたか否かは定かではない。現在は、その大部分の土地が空き地となり、黒部峡谷鉄道の駐車場となっている。

大火以前に建てられた建造物で現存するものとしては、宇奈月谷に架かる富山地方鉄道本線の鉄橋が挙げられる。この鉄橋は大火以前の大正11年の建造とされ、現在も使用されている（図3）。宇奈月温泉の歴史を今に伝える貴重な文化遺産といえる。また、黒部市方面からの地区の入口付近にある御狼の宮も大火で焼け残った建物だと言われている。図1の下部にある小学校の左隣の建物が、この御狼の宮に該当すると推察できる。現在、この神社はご神体が遷座され、空き社となっている。建物の外面は覆われてしまっているが、地区内では再生を望む声も多い。

さらに、建物などは残存していないが、土地利用や景観に関わる歴史的な文脈が継承されていると考えられる事象を整理する。まず、黒部川や宇奈月谷を望む崖線沿いの土地利用が挙げられる。大火前後ともに旅館やホテル、保養所などの宿泊施設として用いられてきた点が、現在まで継承されている。また、古写真を見ると、木造建築の旅館であった時代も建物は崖にせり出すように建築され、崖下の黒部川に延びるように設計されている（図4）。この建て方は現在のホテル群にも継承されており、材料や工法が変化してはいるものの、歴史的な文脈の中で評価することができる。

## 6. まとめ

本研究では、宇奈月温泉における大火前後の土地利用と景観の変容から、現在も残る宇奈月温泉の景観の歴史的な文脈を明らかにすることを試みた。温泉街が黒部川と宇奈月谷の崖線に沿って形成する点、中心部に空地が多い点、温泉街と黒部川電源開発の関連施設がゾーニングで分けられる点などに歴史の連続性を見出すことができる。また、宇奈月谷に架かる富山地方鉄道の鉄橋や御狼の宮など、大火の被害を免れた貴重な歴史的な資源を保全し、再生していくことが今後の当地区の観光まちづくりにおいて肝要になると考える。

### 補注

- (1) 下新川郡内山村は1954（昭和29）年に近隣2町と合併して宇奈月町となり、さらに2006年の合併で黒部市となった。
- (2) ただし、計画は途中で東洋アルミナムの手を離れ、日本電力（現在の関西電力）に引き継がれている。
- (3) 宇奈月温泉地区2区の住民への聞き取りによる。

### 参考文献

- 1) 野島好二：宇奈月温泉の今昔稿-宇奈月温泉小史-，1970。
- 2) 永井宗聖：宇奈月温泉地帯平面図（昭和17年9月15日作製）の発見，日本黒部学会研究紀要「黒部」，第18号，pp.25-31，1977。
- 3) 富澤一弘・若林秀行：明治大正期に於ける富山県宇奈月温泉の研究(1)(2)-温泉関連史料及び新聞史料の検討を中心に-，高崎経済大学論集，第48巻第3号，pp.47-59，2006
- 4) 三日市町協賛会：我が三日市町，pp. 32-33，1926。



図3 宇奈月谷の鉄橋（出典：参考文献4）



図4 崖沿いの旅館（所蔵：うなづき学友館）